起源・福音・いのち

～福音の目的はいのちである～

ソ・ヒョンソプ：著
伊藤仁：訳

（著者紹介）

ソ・ヒョンソプ牧師は韓国外国語大学で経営学（B.A.）、延世大学院で経営学（MBA）を専攻した。1993 年に福音を伝えよとの召命を受けて（第 1 コリント 1:17）、ソウル神学大学院に入り牧会学（M.Div.）を学んだ。2011 年にアメリカのフラー神学校で「みことばの黙想を通した霊性訓練」という論文によって牧会学博士の学位（D.Min.）を受けた。

現在、GL ミッション（福音といのち宣教会）の代表である。2009 年から「福音といのち」キャンプを開催して、韓国だけでなく、中国、アフリカ、中東など各国の現地牧会者に、いのちの福音を教えている。「福音といのち」「みことばの黙想とキリスト教霊性」に深い関心を持ち、福音といのちのミニストリーに集中している。新旧約聖書が証しする福音を通していのちを味わうというキリスト教の核心真理と、いのちの実際である神との交わり、みことばの黙想を伝えている。それによって初代教会の本質である永遠のいのちの共同体、すなわち三位一体の神とつながり一つとなる、三位一体的教会を建て上げることを願っている。

著書には、みことばの黙想の適用的次元を超えて、交わりの観点をあらわした「天に属するみことばの喜び」と、福音を通していのちの道に導く「起源・福音・いのち」（いずれも韓国語、イレ書院）がある。

第１章　イエス・キリストの啓示・・・起源、福音、いのち

（ヨハネ 3:13）だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。
（3:14）モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。
（3:15）それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。

ヨハネの福音書においてイエス・キリストの啓示は、真夜中にイエスの所を訪れたニコデモに与えられました。ニコデモはパリサイ人であり、ユダヤ人の議員として、聖俗両方の分野で頂点まで登りつめた人です。「ニコデモ」という名前は「ニコ」（征服者）と「デモ」（民衆)の結合語で「民衆の征服者」という意味です。 彼はユダヤ教の完成を象徴する人物です。さらにイエスとニコデモの会話は、イエスが現す永遠のいのちの共同体である教会と、ニコデモが現すユダヤ教との会話の象徴です。ニコデモはユダヤ人の中でも敬虔なグループに属するパリサイ人で、彼の社会的身分は議員です。議員は最高の議決機関であるサンヘドリン（最高法院）の構成員です。さらに、ニコデモはイスラエル社会で尊敬される「ラビ（教師)」でした（10 節)。しかも彼は高い地位に伴う大きな富を所有していました（ヨハネ 19:39)。そんなニコデモが、夜にイエスの所に訪れました。 「夜」はラビが律法を研究する時間でした。彼が夜にイエスのもとに来たのは、同僚たちの目を避けるためですが、彼が霊的に暗闇であることを象徴しています。
（ヨハネ 13:30)「ユダはパン切れを受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。」
民衆の征服者であり、信仰の頂上に立っているニコデモは、まだ暗闇に属しています。しかし彼に臨んだ暗闇は、彼をまことの光へと導きます。彼は地上の全てを達成しましたが、まことの光であるキリストが来るまでは、いまだに暗闇の中です。世俗と宗教の分野で頂点に立っているニコデモは、自分が暗闇であることに気づき、まことの光へと出て来ました。自分もラビであるニコデモは、イエスを「神のもとから来られた教師（ラビ)」と呼んでいます。そしてイエスに向かって「神が共におられなければ、このようなしるしは行うことができない」と言います。ニコデモが言ったしるしとは、イエスがエルサレムで行われたしるしを指しています（ヨハネ 2:23)。イエスは、ニコデモが聖俗の頂点に立っていても、いまだに暗闇であることを知っていました。そして彼に必要な唯一のこと、真理を語ります。「まことに、まことに、あなたに言います。」イエスは「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」と言います（3 節)。「新しく生まれる」の正確な翻訳は「上から生まれる」（ギリシャ語でゲネセー アノセン born from Above）です。ヨハネの福音書において「上」とは、神の御子がそこから来て、そこに行く「起源」のことを指します（ヨハネ 3:31、8:23)。神の御子だけが唯一「上から」来ました（ヨハネ 8:23)。イエスは父なる神から生まれた御子「ひとり子」です（ヨハネ 5:26、1:18)。ヨハネ 3：13-15 で、イエスは「天上のこと」を具体的に証しします。これはイエス・キリストの自己啓示です。私たちの信仰生活は、誰かからイエスについて聞くことによって始まります。しかし神の時になると、私たちはイエス・キリストから直接聞きます。パウロは、自分が宣べ伝えた福音は、人間によるものではなく、人間から受けたのでも、また教えられたのでもない、と言いました。彼の福音は、ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです（ガラテヤ 1:12)。イエスがニコデモに言った最後の言葉は、イエスの直接的啓示であり、キリスト教の真理の本体です。それはイエス・キリストの 3 つの啓示です

（ヨハネ 3:13）起源：人の子、天から来られた。
（ヨハネ 3:14）福音：人の子、地から上げられる。
（ヨハネ 3:15）いのち：人の子、永遠のいのちを与える。

起源：人の子、天から来られた。

イエス・キリストの最初の啓示は起源です。キリスト教の真理は他の宗教とは異なり「起源」を知ることから始まります。 仏教では、このような話が伝えられています。ある日、比丘尼マルキャプタがブッダに尋ねました。「神、宇宙、世界の起源が何であるかを教えてください。そうしなければ、あなたのもとを去ります。」するとブッダはこの寓話を聞かせました。 「ある人が毒矢を受けて死ぬときに、矢を撃った人が誰か、打った距離がどれくらいか、何の木で矢を作ったのか、と頑固に聞いて、ついに死んでしまった。」この話は、仏教が起源を求める宗教ではなく、人間の実存的な苦しみを問う宗教である、という意味です。イエス・キリストの啓示は、起源がその始まりです。旧約聖書の箴言では、起源を知らない者を獣のよう（粗野）だと言います。
（箴言 30：2-4)「まことに、私は粗野で、人ではない。私には人間としての分別がない。私はまだ知恵も学ばず、聖なる方の知識も持っていない。だれが天に上り、また降りて来たのか。だれが風を両手のひらに集めたのか。だれが水を衣のうちに包んだのか。だれが地のすべての限界を堅く定めたのか。その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。」
　イエス・キリストは自分の起源が「天」だと言われます。 彼は天から来られた「人の子」です。「人の子」はイエス・キリストの自己啓示です。 「人の子」は「その人の息子」(the Son of Man）であり、イエス・キリストだけに限って使われる称号です。人の子の旧約的根拠はダニエル 7 章にあります。
（ダニ 7:13-14)「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」
ダニエルが見た幻では、地上の統治者は獣として表されています（ダニエル 7：1-8、獅子、熊、豹、十角の獣)。獅子はバビロン帝国を、熊はバビロンを滅ぼしたメディア帝国を、豹はペルシャ帝国を、十角の獣はギリシャ帝国を表しています。 これらはかつて繁栄しましたが、草の花のように枯れて消えていった国々です。一方、人の子は地上の統治者と対照的に、天に属する者です。彼は永遠におられる神から権威と栄光と国を受け、永遠の御国を立てます。帝国を表わす獣の国は、跡形もなく消え去り、人の子の御国は永遠に存続する国です。ユダヤ教の文書では、エノクは天に属する人の子のようになるために天に上ります（第 1 エノク 70：2、71：1)。 「人の子」あるいは「人の子のような方」は、天から来られた神の御子、すなわちロゴスです（ヨハネ 1:1、1:14、1:18、3:16)。天から来られた人の子は再び天に上ります。

「天」(heaven）は、造られた「空」(sky）ではなく、人の子が来た場所である創造以前の世界を指します。イエスの起源は「天」です。預言者ミカはキリストの起源を「永遠の昔」と呼びました（ミカ 5：2)。天は「上」であり（ヨハネ 3:31、8:23)、「万物の上」であり（ヨハネ 3:31)、初めであり（ヨハネ 1：1)、創世前の世界です（ヨハネ 17:5)。万物の上、天、初め、創世前を神学的には「永遠」と呼びます。創世前の世界は創造された世界と区別されます。創世前の世界は無限の世界であり、恒常性の世界です。 一方、地（ヨハネ 3:31)、下（ヨハネ 8:23）は万物の中の世界であり、有限性と無常性の世界です。唯一のまことの神とその御子は初めからおられ（ヨハネ 1：1)、万物の上にいます（ローマ 9：5、エペソ 4：6)。万物の上におられる神とその御子が万物を創造されました。神は御子が造った万物を、その足の下に置きます。
（Ｉコリント 15:27)「『神は万物をその方の足の下に従わせた』のです。しかし、万物が従わせられたと言うとき、そこには万物をキリストに従わせた方が含まれていないことは明らかです。」

福音：人の子、地から上げられる。

イエス・キリストの第二の啓示は福音です。天から来られた人の子は、モーセが荒野で蛇を上げたように地から上げられます。出エジプトして荒野を通ったイスラエルの民は、神が導く「道」のために我慢ができなくなりました(民 21:4)。これは、イスラエルの民に対する神の御心と、神に対する民の期待が異なっていたからです。同じ思いでなければ、一緒に歩くことはできません(アモス 3:3)。民は彼らの指導者モーセに不満を言いましたが、それは神に対して不満を言うことでした（民 21：5)。その結果、神は彼らに罰を与え、彼らは燃える蛇にかまれて死にました。民がモーセに助けを求めると、神はモーセに青銅の蛇を作らせ、旗ざおの上に付けるようにされました。蛇にかまれた者がその青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きました。

（民 21:9)「モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。」

イエス・キリストはモーセが荒野で蛇を上げた出来事を、自分についての予表であると言っています。すなわち、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も地から上げられると言われます。新約聖書で「上げる」(ギリシャ語でフプスオ）は、キリストの死と復活と昇天を意味します。人の子は地上から上げられて死に、全ての人を自分のもとに引き寄せます。

（ヨハネ 12:32-33)「『わたしが地上から上げられる（フプスオ）とき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。』これは、ご自分がどのような死に方で死ぬことになるかを示して、言われたのである。」

イエスが地上から上げられることは、イエスの十字架での死を意味します。イエスが十字架で死んだとき、全ての人を自分のもとに引き寄せました。パウロは、一人のイエス・キリストが全ての人のために死んだので、全ての人が死んだと証します。

（Ⅱコリント 5:14)「私たちはこう考えました。一人の人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである、と。」

イエス・キリストが全ての人に代わって死ぬことによって、アダムの内で罪人として生まれた全ての人が死にました。これは神が御子を通してなされた救いのわざです。使徒パウロは回心する前、神がイスラエルを選ばれたという選民思想を徹底的に信じていました。しかし彼は復活したイエスに会い、イエスが全ての人の代わりに死んだ、ということを霊で知りました。それ以後パウロは、肉に従ってキリストを知ろうとしない、と言いました（Ⅱコリント 5:16)。つまり、全ての人を差別なく、キリストが代わりに死んだ救いの対象として見たのです。彼はキリストのこの愛に捕えられて、福音を伝える働きに自分の命を惜しみませんでした。次に、人の子が上げられるとは、彼の復活と昇天を意味します。十字架で死んで復活したキリストは天に昇りました。使徒の働きで「上る」(フプスオ）とは「キリストの昇天」を表す言葉です。

（使 2:33)「ですから、神の右に上げられた（フプスオ）イエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」

（使徒 5:31)「神は、イスラエルを悔い改めさせ、罪の赦しを与えるために、このイエスを導き手、また救い主として、ご自分の右に上げられました（フプスオ)。」

イエス・キリストは十字架で死にましたが、神が彼を生かし、主とキリストにされました（使徒 2:36)。イエス・キリストは死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示されました（ローマ 1：4)。復活したキリストは 40 日間地上にとどまって弟子たちに現れ、ご自分についてモーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就したと言われました（ルカ 24:44)。 彼は十字架で死んで復活することによって、旧約聖書で証しされたメシアのわざを成就しました（ルカ 24:46)。そしてその名によって、罪の赦しを得させる悔い

改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられ、弟子たちがそれらのことの証人となると言われました（ルカ 24：47-48）。 弟子たちがキリストのみわざの証人になるのは、ただ上からの力を受けたときにのみ可能です。すなわち弟子たちに聖霊が臨むと彼らは力を受けて、エルサレムから始まり地の果てにまで、イエス・キリストの証人になるのです（使徒 1：8）。復活したイエスは、この命令を授けて天に昇られました。キリストが天に昇られるのは、信じる者に聖霊を送るためです。

（ヨハネ 16:7-8）「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。」

（ヨハネ 16:13）「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。」

真理の御霊は、イエスが話された永遠のいのちのみことばを明らかにし、彼が十字架で死んで復活したことを証します。ですから、イエス・キリストが証しした永遠のいのちのみことばは、人の子が上げられた後に送られる聖霊によって、初めて悟るようになります。

（ヨハネ 8:28）「そこで、イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げた（フプスオ）とき、そのとき、わたしが『わたしはある』であること、また、わたしが自分からは何もせず、父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していたことを、あなたがたは知るようになります。」

新約聖書の原福音は、キリストの死、葬り、復活、現れの出来事です（第 1 コリント 15：3-5）。「人の子が上げられる」ことは、彼の死と葬り、復活、昇天、聖霊を送ることを総括する「福音」です。福音は、創世前から存在している神の御子であり、彼が行われた救いのみわざである「メシア的行為」です（マルコ 1：1、15：3-5）。なので、人の子が上げられることは「メシア的行為」としての福音です。

いのち：人の子、永遠のいのちを与える

天から来た人の子が地から上げられました。神の御子が十字架で死んで復活されました。その目的は、彼を信じる者に永遠のいのちを与えることです。ヨハネ 3 章 15 節のギリシャ語のいくつかの写本には「滅びない」が含まれています（キング・ジェームズ訳を参照）。ヨハネ 3:15 の「人の子にあって永遠のいのちを持つため」という言葉は、3:16 の「滅びることなく永遠のいのちを持つため」と並行しています。「御子を信じる」ことは「地から上げられた人の子を信じる」という意味です。これは十字架で死んで復活したキリスト、すなわち福音を信じることです。ヨハネの福音書で「彼を信じる」という表現は、常に「～の中へ」（ギリシャ語でエイス）を意味します（into、in）。本来「信じる」という動詞は前置詞が必要ない他動詞です。 例えば「聖書を信じる」または「みことばを信じる」という表現は、前置詞が伴いません（ヨハネ 2:22）。だから「彼を信じる」という言葉は「彼の中に入る」と言い、直前の節に関連して「彼のメシア的行為につながる」という意味です。具体的に言うと、イエス・キリストの死と葬り、復活に結びついた者は、新しいいのちを得て、そのいのちを享受します（ローマ 6：4）。ヨハネの福音書では、神の国は 3 章 3 節と 5 節に 2 回出て来ます。 新約聖書で神の国、永遠のいのち、救いは、同じ意味で使われています（ルカ 18：18-26）。ヨハネの福音書では、主に「永遠のいのち」又は「いのち」を使います（36 回）。 一方、共観福音書で言う永遠のいのちは、未来に成就するいのちです（17 回）。 ヨハネ 3 章 15 節と 16 節の「永遠のいのちを得る」という表現は、3 章 17 節では「救われる」と表現します。ヨハネの福音書では、救いは永遠のいのちと同じ意味で 4 回言及されています（3:17、10:9、12:27、12:47）。ヨハネ

の福音書とヨハネの手紙第一では、永遠のいのちは以下の 4 種類で説明されています。

1 番目に、永遠のいのちは「御子の内のいのち」です。永遠のいのちの起源は、創世前に父なる神がご自分の内にあるいのちを御子に与えて、その内にいるようにしたことです（ヨハネ 5:26)。箴言 8：22-26 では、創世前に神から生まれた御子は、知恵として表されます。創世前に神がなされた最初の事は知恵（御子）を生んだことです。永遠のいのちは、創世前に父が御子に与えたいのちであり「御子の内のいのち」です（ヨハネ 1：4、第 1 ヨハネ 5:11)。

2 番目に、永遠のいのちは「信者の内にあるいのち」です。イエスがキリストであると信じる者は、神から生まれた者です (第 1 ヨハネ 5:10)。イエスが神の御子であると信じる者は、その内に永遠のいのちがある者です (第 1 ヨハネ 5:13)。御子を持つ者はいのちを持っており、御子を持たない者はいのちを持っていません。(第 1 ヨハネ 5:11)。いのちを持つ御子を受け入れる者は皆、永遠のいのちを得て、神の子どもとなる特権を持ちます（ヨハネ 1:12)。信者が永遠のいのちを得ることは、父のいのちを得るのではなく、御子の内にあるいのちを得ることです。父のいのちを唯一受けた者は御子だけです。だから、私たちは彼をひとり子と呼びます。

3 番目は、永遠のいのちの現在性です。永遠のいのちは、それを得たらすぐに今享受するいのちです。ヨハネの福音書では現在享受するいのちが強調されています。永遠のいのちは唯一のまことの神と、神が遣わされたイエス・キリストを知ることです(ヨハネ 17:3)。「知ること」は御子と父の内にとどまる霊的実在です(ヨハネ 17:21-24、第 1 ヨハネ 2:24-25)。現在享受する永遠のいのちは、聖霊の内にあって父と御子の中にとどまり（ヨハネ 14:20)、父の家でひとり子の栄光を見ることです（ヨハネ 17:24)。ひとり子の栄光は、父の恵み（ヘブル語でヘセド）とまこと（ヘブル語でエメト）が満ちた状態です。旧約時代に神の栄光を見た者は、その恵みとまことで満ちていました（出エジプト 34:6)。恵みとまことの二つの概念は、新約時代の恵みとまことの二つの概念で表現されます（ヨハネ 1:14)。ひとり子に満ちた父の恵みとまことが私たちに満ちる時、これは恵みの上のさらなる恵みです（ヨハネ 1:16)。

4 番目は、永遠のいのちの未来性です。永遠のいのちは、死後も続くいのちです。永遠のいのちは肉体の死で中断されません。永遠のいのちを持つ者は、肉体の死後、主と対面での交わりを通して、永遠のいのちをより豊かに享受します(Ⅱコリント 5:8、ピリピ 1:23)。このとき肉体は、終末に栄光の体で復活する姿のための種として植えられます(Ⅰコリント 15:35-44)。そして永遠のいのちは、終末に肉体の復活と共に、栄光に満ちた形で完成されます。
（ヨハネ 5:29)「そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」
（ヨハネ 6:40)「わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」

生命の階層秩序(Hierarchy of Life)

古代の哲学者アリストテレスは「植物 → 動物 → 人間」という存在物の階層構造を考えさせるのに寄与しました。これは後に初期キリスト教思想家たちが「創造主」と「被造物」の関係を説明するのに、また中世のスコラ神学者たちが自然まで含めた階層的秩序を説明するのに貢献しました。しかし、アウグスティヌスやトマス・ア

クィナス(T. Aquinas)をはじめとするスコラ神学者たちには、このような存在物の階層構造は超越的世界にまで拡張された存在の階層構造を意味しました。これはピラミッド型の存在の階層構造であり、その頂点には神が存在し、その下には天使があり、その下には人間、動物、植物があるということです。そのため、古代や中世の人々はピラミッドの階層構造を神が与えた世界の本質および価値体系として受け入れていました。トマス・アクィナスはピラミッド型の存在の階層構造を次のように説明しています。植物の上に動物があり、動物は植物にはない感覚的能力と認識能力を持っています。動物の上に人間がいますが、人間は動物にない精神的なもの（不滅のもの）を持っています。そして、肉体のない純粋な精神である天使は人間よりも高い存在です。しかし、天使は創造された精神として、創造されたのではない純粋な精神である神よりも下にあります。
ジン・エドワード（Gene Edward）は存在の階層構造を応用して「生命・生物学図表」を提示しました。彼が提示した図を参考にして「生命の階層秩序」を論じると、次のようになります。最も高い生命として神の生命があり、第 2 の生命体として天使があり、第 3 の生命体として堕落前後の人間があり、第 4 の生命体として動物があり、第 5 の生命体として植物があります。生命の階層秩序において、上位の生命の権威は下位の生命を支配します。蟻の命は、植物の王であるバオバブの木をかじり倒す権威を持っています。人間の命は、獣の世界を支配する権威を持っています。しかし、人間の命は天使よりもわずかに劣っており（詩篇 8:5)、天使の支配を受けます。それゆえユダヤ人たちは、奇跡を行い祝福を与える天使を崇拝しました。堕落した天使は空中の権威を持つ者となり、罪と過ちで死んでいる者を支配します（エペソ 2:1-2)。最高位の命は神のいのちであり、御子に与えられたいのちです。天から来られた人の子は十字架で死に、復活することによって、彼を信じる者に彼のいのちを与えます。すなわち福音は、地から生まれた命（第 3 の生命）を天に属するいのち（第 1 の生命）として生み出す力です。イエスが神の御子キリストであると信じる者は皆、御子のいのち、すなわち永遠のいのちを得ます（ヨハネ 20:31、第 2 テモテ 1:10)。福音が喜ばしい知らせであるのは、人間から生まれた命が、神から生まれるいのちを得るからです（ヨハネ 1:12-13)。